
世界文学から見た〈静かな革命〉
La Révolution tranquille au prisme de la littérature-monde

趣旨と概要
Introduction

立花 英裕
TACHIBANA Hidehiro

〈世界文学〉を最初に語ったのはゲーテだと言われている。中国文学を読んだ感想を語る際にこの言葉を使ったという。1827年のことだから、ナポレオン戦争後、ヨーロッパ情勢が落ち着いてきて、国境を越えて文学が読まれる環境が醸成されたと考えられる。現代に目を移すと、代表的な〈世界文学〉論としてデイヴィッド・ダムロッシュのそれがあるが、そこでは、ゲーテを踏まえつつ、翻訳のプロセスなど新しい視点や読みが導入されている。

本シンポジウムは、ケベック文学を〈世界文学〉として読んでみようではないかという発想から企画された。ケベックの文学はこれまでケベックの歴史や文化的文脈の中でだけ読まれる傾向が強かった。特に、〈静かな革命〉期の文学は、ケベック・ナショナリズムと結びつけられてきた。1980年以降、ダニー・ラフェリエルやアキ・シマザキのような作家が登場し、いわゆる「移動文学」論が盛んになるが、それ以前のケベック文学からは切り離されて捉えられている。ケベック文学を〈世界文学〉として読むことによって、新たな視座が得られるかもしれない。

ここで、フランスの状況を参考までに見ておけば、フランスの〈世界文学〉論は、*Littératures francophones*、つまりフランス語圏文学ないしフランコフォン文学の批判として登場する。つまり、最初から論争の様相を呈しているのである。その切っ掛けとなったのは、2007年3月15日に「ルモンド」紙に掲載された記事「フランス語による〈世界文学〉のために Pour une « littérature-monde » en français」である。これは一種の文学 маниフェストであり、小説家ジャン・ルオー Jean Rouaud と小説家・評論家のミシェル・ルブリ Michel Le Bris が共著者だが、ノーベル文学賞受賞作家ル・クレジオを含む44名の作家によって署名されていたこともあり、非常に大きな反響を呼んだ。ミシェル・ルブリは、1970年代初頭にマオイストの新聞『人民の大義』の編集長となり逮捕され、その後任にサルトルが就いたという出来事があり、若い頃からよく知られていた人物である。この文学 маниフェストの背景には、出版界に認識を改めるように強いた当時の文学状況がある。秋の主な文学賞が「フランコフォン」の作家たちに次々に掠られるようになり、それまで一段下に見られ

ていた「フランコフォン文学」が無視できなくなったのである。他方、書店において「フランス文学」のコーナーに本を置いてもらえない「フランコフォン」作家たちが、「フランコフォン」というカテゴリーに隔離と差別を感じるという事情も絡んでいる。ルブリらのマニフェストは、「フランス」とか「フランコフォン」、あるいは「フランコフォニー」といったカテゴリーを越えたところに新たな読む喜びを見いだそうとするものだった。記事は実質的にミシェル・ルブリによって執筆された印象を与えるが、そこで彼は、移民系の作家やフランス以外の地域の作家によって書かれた作品がフランスの出版界で正当に評価されてこなかったことを反省しつつ、現代の〈世界文学〉は移民の集まる都市空間の文学であると説き、従来の区分を超えた「フランス語による世界文学」へと視野を広げる必要を訴える。また他方で、植民地に出自をもつ文学であることが想起される「フランコフォン文学」という名称を時代遅れとして激しく退けている。彼に言わせれば、フランス語という言葉はあっても、フランコフォンという言葉は存在しないのである。ケベック文学については、レジャン・デュシャルムのような作家がフランスで認められてこなかったことを嘆いている。このような「フランス」とか「フランコフォニー」といったカテゴリーを超えたフランス語の文学の具体的な受け皿として、ミシェル・ルブリらは、「驚異の旅人たち *Étonnants Voyageurs*」という文学フェスティバルを組織している。これは、世界中の作家と読者、そして出版人が出会う祭典であり、プルトーニュのサン・マロ市で毎年開かれている。

以上のような論争と出版流通の場の中にケベック文学を置いたとき何が見えてくるだろうか。ケベック文学を〈世界文学〉として読むといっても、言うまでもないが、文学作品を生んだ文化や社会を軽視するという事ではない。むしろ、文化的・社会的コンテクストをより深く掘り下げる社会科学的視点を伴ってこそ今日の文学の世界性が見えてくるはずなのである。本シンポジウムにおいて、「静かな革命」という社会的・政治的出来事を視野に入れたのは、そのような理由からである。したがって、本シンポジウムにおいては、「ネイション」とか「国民文学」といった、近代に関わる諸概念を否定したり、無効にしたりしようというのではない。むしろ、なぜケベック文学が「ネイション」の構築に不可欠な役割を演じたのかを問い直すことを通して、「世界文学」としてのケベック文学の位相を考えてみたいのである。ジャック・ゴドブーに言わせれば、「一つのネイションは文学をもたずには存在しえない」のである。彼は「静かな革命」を振り返って、「1958年、私たちは一つの文学を作り出したかった。そして以後、文学の方が私たちを作ったのである」と述べている。「静かな革命」が本当に「革命」だったのかどうかは別として、これほど文学が直接的・同時的に参与した「革命」は稀ではないだろうか。そのように深くケベック人の「誕生」に関わった文学の「世界性」を問うことは決して無駄ではないはずである。

最初の報告者西成彦氏は、「アメリカ文学」という概念を立て、それをアメリカ

合衆国の英語文学という枠ではなく、南アメリカをふくめた多言語的な文学空間として設定し、そこにケベック文学を置いてみせた。印象的だったのは、「アメリカ文学」が幾つかの「大きな舌」と多数の「小さな舌」によって構成されていると指摘する眼差しだった。「大きな舌」とは、スペイン語、ポルトガル語、英語、オランダ語、フランス語のような帝国主義の言語であり、「小さな舌」とは、マヤ語やケチュア語などの先住民言語とイディッシュ語などの新移民の言語を指す。

次に、荒木隆人氏が、政治的な側面から「静かな革命」と、その立役者の一人、ルネ・レヴェックを論じた。「静かな革命」が「革命」と呼ばれるのは、「フランス語系カナダ人が自らの社会やネイションについて抱くイデオロギーの転換が生じた」からであり、「フランス系カナダ人」という血統を重視したナショナリズムから、「ケベック州という「領域」を重視したケベック・ナショナリズムへと変化した」ためであるとした上で、ルネ・レヴェックには「多元性についての志向」が見られ、それが「主権連合」という国家連合の思想にも反映しているとしている。このような多元性を受け入れる姿勢が「静かな革命」の根底に流れているのだとすれば、ケベック・ナショナリズムにおけるアイデンティティのあり方をもう一度問い直す必要があるだろう。更に、荒木氏は、ルサーージュ時代のケベック自由党が経済政策に専念し、その政策には「革命」的なものはなかったという趣旨をルネ・レヴェックが述べていると報告し、1968年にケベック党を設立したのは、そのような欠如を補うためだったと指摘している。この指摘は、廣松氏の発表で取り上げられた、雑誌『*Parti pris*』（1963年創刊）の果たした役割を見定める上でも重要である。

3番目の発表者廣松勲氏は、「静かな革命」の中で雑誌『*Parti pris*』が発信した言説がどのようなものであったかを論じた。主にこの雑誌に掲載されたマニフェストの分析が報告されたが、それによれば、『*Parti pris*』のマニフェストは、ケベック州を植民地的状況と捉え、そこに観察される搾取や支配の分析を通して「脱植民地化」を訴え、国民を解放する革命運動、すなわち独立を求める運動の必然性を説いていた。また、マニフェストの言説は、マルクス主義や実存主義に立脚しつつ、フランツ・ファノン、エメ・セゼール、アルベール・メンミラから大きな影響を受けており、中南米諸国やアフリカ諸国との連帯を模索するものでもあった。廣松氏は、そこに「ケベック性」の探求を「世界性」の探求に繋げる試みが認められるとしている。「静かな革命」の中で『*Parti pris*』が果たした役割は、日本ではまだ十分に論じられていないが、研究の重要な一步を印した発表だった。

私（立花）の発表は、ガストン・ミロンを、「静かな革命」の中で形成された重層的な想像域を先駆的に切り拓いた詩人として捉え、彼の極めてケベック的な模索と放浪の中に、ミロンという詩人の「世界性」を探るものだった。ミロンにおける自然や風景は欠如や剥奪の意識に結びついていて、独特の異他性を帯びた意識の場を開いている。たとえば、恋愛詩においては、恋人の表象がケベック的自然と結びつき、独特の比喩的・隠喩的想像域を切り拓いている。あるいは、アメリカ大陸に住む人間としての自覚が、そうした体験を通して形成されるという。そこで重要な役割を果たしているのがユーモアである。ユーモアによって、詩人の自己意識は否

定性の中に閉じ込められるのではなく、自己肯定の契機を見いだすとも指摘した。

シンポジウムを終え、当初の趣旨を実現できたかどうかを省みると、不十分な点ばかりが目につく。「アメリカ」という空間、「静かな革命」という壮大な現象、「ケベック文学」の諸側面、そして「世界文学」という視点、それらがしっかりかみ合うところまではいかなかったと言わなければならない。しかし、それでも、「世界文学」という視点を導入することによって、「ケベック文学」を、「アメリカ」あるいは「世界性」という空間と、「静かな革命」という歴史的コンテクストの中に同時的・重層的に位置づけながら、今日的な立場から読み直す可能性を示すことはなんとかできたのではないだろうか。ケベック・ナショナリズムと緊密に結びついた20世紀後半のケベック文学は、決して内に閉じた閉鎖的な文学ではなかった。アメリカ大陸の他の文学との繋がり、アフリカやカリブ海の反植民地主義運動との関わり、更に付け加えて言えば、ガストン・ミロンがフランスに滞在して、ケベックという存在を訴え、多くの文学者や知識人とのネットワークを作り出したことも、「静かな革命」期の「ケベック文学」に深く関わっている。カナダの英語文学との関係も視野に入れなくてはならないだろう。いずれにしても、従来型の無意識的に国境に閉じ込められた視野の中では、「移動文学」へと展開していく「ケベック文学」を捉えきれない。私たちは、今日、国境的区分に惑わされない、新たなカルトグラフィ（地図）を必要としているのである。

もちろん、こうした視野をもつための前提として、「ケベック文学」自体のよりよい理解が求められることは言うまでもない。繰り返しになるが、雑誌『*Parti pris*』にしても、ようやく紹介できたという段階にあるにすぎない。この点について、シンポジウムでは触れられなかった、ごく初歩的なことを、リーズ・ゴーヴァン Lise Gauvin を参照しながら補足しておこう。彼女によれば、『*Parti pris*』刊行前夜のケベックは、内側から見ると次のように見えたのである——「ナショナルな現在時を生きるとは、1963年において、夜の時間、否定性と虚無、そして自己の不在の時間を受け入れることである」¹。その夜闇に包まれた空間に、ジャック・フェロンの表現によれば、「雑誌は、ガスベジエの夏のように前触れもなく炸裂した。[...] 私は、「一体あればなんなんだ」と言うジャン・ベルランの顔つきをいまでもよく覚えている」。そんな不意打ちだったにもかかわらず、『*Parti pris*』は瞬く間に3000人の定期購読者を獲得した。そして、「ケベック」という言葉が予期せぬ響きを帯びて発せられたのは、この雑誌の第1号においてなのである。更に、リーズ・ゴーヴァンを援用しよう——「雑誌が選択したオプションというのは、以後ケベックと呼ばなければならない、一つの現実と、一つの現在にしっかり根を下ろすことであり、フランス系カナダという語が構成する二重の他者性の象徴を、歴史資料館にしまい込むことである。「*Notre littérature s'appellera québécoise ou ne s'appellera pas*」とローラン・ジルアールは高らかに言い放つ」²。ローラン・ジルアール Laurent Girouard は著名な考古学者であり、*Parti pris* 出版の *directeur* も務めている。引用されている言葉は、「我々の植民地文学」と題された記事に見えるもので、第1巻3号（1963

年12月)に掲載されている。この文は、どう訳せばいいのだろうか、「我々の文学はケベック文学なのか、それとも存在さえしないのかそれが問題だ」とでも、しておこう。

最近の文学研究は、雑誌研究が重要な位置を占めている。というのも、雑誌は、有力な文学者を中心として、一定の象徴権力をもつ文学〈界〉を形成するからであって、著者と読者を結ぶ重要な媒体だからである。文学テキストを内在的に読むだけでは、文学の機能を十全に明らかにすることができないというのが、最近の文学研究の傾向である。今日の文学者の動向を見ると、雑誌が国境を超えて作家達を結びつけ、ケベックの作家が、カリブ海やフランス、あるいはアフリカの作家達と日常的に交流している。それは誰もが目にする光景である。そこに、私たちはインターネット時代の「世界性」の一面を見てもよいだろう。今日、「国民文学」は解体したと言ってよいが、文学はしっかりと存在している。その「世界性」において。

注

- 1 Lise Gauvin, *Parti pris littéraire*, Fac-similé de l'édition originale avec une postface d'André Major, Les Presses de l'Université de Montréal, 2013, p. 21.
- 2 *Ibid.*, p. 22.

【シンポジウム】

世界文学から見た〈静かな革命〉

La Révolution tranquille au prisme de la littérature-monde

アメリカ文学とは何か
～北米文学の現在～Qu'est-ce que la littérature des Amériques?
— La littérature nord-américaine au présent西 成彦
NISHI Masahiko

「アメリカ」が「合衆国」という国名をだけを意味して終わるというケースは珍しくない。だが、その「合衆国」においてさえ、「文学」は「英語」だけで書かれているわけではない。先住民族の口頭伝承は、それぞれの言語で継承されてきたし、「合衆国」の領土拡張に伴い、地域によってはフランス語やスペイン語による文学創造が盛んだった時代もある。19世紀以降になると、「合衆国」に移り住んだ新移民が、とくにその第1世代のあいだで「母語＝継承語」を用いた文学創造を行った。日本語文学、イディッシュ文学、あるいは亡命者の残したドイツ語文学も「合衆国文学」の一部をなしている。

私は南北アメリカ大陸の文学に環カリブ海地域の文学までを加えた全体を「アメリカ文学」の名で呼ぶことを優先したい。この意味における「アメリカ文学」は、帝国主義の言語であったスペイン語、ポルトガル語、英語、オランダ語、フランス語という5つの「大きな舌」と、先住民族語（マヤ語やケチュア語、グアラニー語など）や新移民の言語（イディッシュ語その他）といった多くの「小さな舌」によって生み出されている。「合衆国の文学」や「カナダの文学」「ケベック文学」は、そうした「アメリカ文学」の構成要素である。

今回はこの枠組みのなかで、「ケベック文学」という、世界的に見た場合には、アジアやアフリカにまで勢力圏を有する「フランス語圏文学」の重要な構成要素について考えてみたい。

20世紀にアンチーフ諸島＝西インド諸島は合衆国の前庭になるが、ハイチは、合衆国の軍事侵攻や傀儡政権の誕生によって、ますますフランスから引きはがされ、北米に顔を向けた国家へと変貌する。そうした事態を象徴するのが、合衆国における英語作家エドウィジ・ダンチカの登場である。2000年にダンチカが来日した頃、私はハイチ系の北米作家としてモンリオール在住のエミール・オリヴィエという大御所も存在すると知った。そして、まさにそのオリヴィエの後継者のようにして

日本でも人気を誇るようになったのが、ダニー・ラフェリエールである。

ラフェリエールの『帰還の謎』は彼自身の「帰郷ノート」として読むことができる。カリブ海世界という檻を逃れて、ヨーロッパや北米を目指した知識人はエメ・セゼールをはじめとして数知れない。カリブ出身の北米作家で言えば、アンチグア出身のジャマイカ・キンケイドもそうした部類に属す。ノーベル賞詩人、デレク・ウォルコットの長篇叙事詩『オメーロス』の背後に流れるのも、「帰郷」なる体験が可能にする重たくて、耐えようにも耐えがたいような一種の「回復不能性」の感覚だった。カリブ詩人、カリブ作家は、自分のやり方で「失われた土地を求める旅」を積み重ね、それぞれの「帰郷ノート」をつづっているのである。

『帰還の謎』と『ハイチ震災日記』に目を向けるなら、ラフェリエールの「帰郷」はひとつつながりの変奏曲のような様相を呈する。1度目の「帰郷」の後、今度はあらためてハイチ地震をみずから経験するのだが、そうしたことで、ラフェリエールは「カリブ作家」として新しい「帰郷物語」の形式を試すことになったと言えるかもしれない。

このように、カリブ海出身の作家が今日では北米の文壇において大きなプレゼンスを示すようになってきている。その際に、合衆国という土地には、非英語圏の作家たちに英語の採用（要するに米国の養子となること）を強要する傾向が見られるが、フランス語圏の1つでもあるケベックを擁するカナダは、フランス語圏のカリブ作家にとって魅力的な土地だった。もっとも、ケベックのハイチ系文学が決してフランス語圏文学のなかに閉じたわけではなく、ラフェリエールの父親がニューヨークで亡くなったように、ケベックのフランス語文学は、カリブ海地域や北米の各地に家族や血縁を有する広義の「アメリカ文学」を構成するのである。南北アメリカのなかでのマイグレーションは、北から南、南から北へと激しい人口移動を引き起こし、しばしば語圏の壁をも越える越境的な側面を示すのである。

カナダは英語圏だけではなく、仏語圏文学の世界的なセンターの1つでもあり、フランス語圏の国々や地域からの移民を容易に受け入れている。米国にも「ルイジアナ割譲」からしばらくのあいだはフランス語作家や詩人が存在したが、世代交代とともに基本的に英語でしか書かなくなった、これが米国モデルである。同じモデルはスペイン語圏のラテンアメリカ諸国や、ポルトガル語圏ブラジルにもあてはまる。このような「アメリカ文学」の全体のなかにカナダ文学を置かならば、その2言語並立状況はきわめて特異なものだと言える。これは「フランス語圏アメリカ文学」という枠組みのなかで考えていたのでは見えてこない論点ではないかと思う。カナダ文学がそうであるように、「北米文学」という範疇のなかで「英語圏文学」と「フランス語圏文学」は競合関係にあるのである。

(にし まさひこ 立命館大学教授)

【シンポジウム】

世界文学から見た〈静かな革命〉

La Révolution tranquille au prisme de la littérature-monde

「静かな革命」とルネ・レヴェック La Révolution tranquille et René Lévesque

荒木 隆人
ARAKI Takahito

「静かな革命」とは、1960年代のケベック州における一連の大規模な社会・経済改革である。とりわけ、この改革が「革命」と呼ばれるのに相応しいのは、フランス語系カナダ人が自らの社会やネイションについて抱くイデオロギーの転換が生じたからである¹。それを示すものとしては、フランス語系カナダ人の多くが、かつて教育や福祉を通じて強い影響を受けていたカトリック教会の影響下から離れ、近代的で普遍的な価値観を重視するようになったことが挙げられる。強くまた、この時期にナショナリズムの形態も、従来のフランス人を祖先にもつという血統を重視したフランス系カナダ人のナショナリズムから、ケベック州という「領域」を重視したケベック・ナショナリズムへと変化した。

このように、「静かな革命」はとりわけ、思想的にケベック社会に変化をもたらした点に重要な意義があったが、近代的で普遍的な価値観の重視をもたらした「静かな革命」は新しく生じたケベックのナショナリズムの方向性にいかなる影響を与えたのか。この点を今一度明らかにするために、本稿ではケベック自由党政権の下で天然資源大臣として「静かな革命」の立役者の一人であったルネ・レヴェックの視点を通じて考えてみたい。

「静かな革命」を代表する政治家の一人であるレヴェックは1922年に生まれ、ラヴァル大学法学部を中退後、第二次大戦中は、戦時レポーターの経験を積む。1956年からフランス語放送局であるラジオ・カナダ局で報道番組の人気キャスターとなる。1958年のラジオ・カナダ局におけるストライキ事件を経て、カナダにおけるフランス語系カナダ人の差別の問題を強く意識するようになり、この差別の問題を改善するために1960年の州選挙においてケベック自由党のジャン・ルサーージュ (Jean Lesage) の陣営に加わった。州選挙での勝利の後、レヴェックはケベック自由党政権の下で「静かな革命」事業に携わることになる。レヴェックの「静かな革命」時代の成果として特に知られるのは、英語系資本の民間会社を州が買収して、州経営の「イドロ・ケベック」社に統合した電力会社の州有化である。

しかし、レヴェックにとって、電力会社の州有化のような経済・社会改革だけで

は、それは「革命」と呼べるようなものではないと語っている。実際、「静かな革命」は結局、当面の事情に合わせるために作られた一連の諸政策に過ぎなかったとレヴェックは述べている²。「静かな革命」の事業の結果として、フランス語系カナダ人が自信をつけるにつれてケベックのナショナリズムの熱は高まる一方であったが、そのケベックのナショナリズムの方向性についてはルサーージュ時代のケベック自由党は何も道筋をつけることはなかったのである。

「静かな革命」以後のこの新しいナショナリズムの方向性の模索こそが彼にとって重要な課題であった。このケベックのナショナリズムは排外的なナショナリズムとして内に閉じこもることになるのか。それとも、フランス語系カナダの文化以外に対して開放的な性格をもつようになるのか。まさに、「静かな革命」期のケベック人のアイデンティティは不安定な状態にあったのである。レヴェックは、新しいナショナリズムの方向性をつけるべく、新しい政党の設立を構想する。そのために、彼はケベック自由党を脱退し、自らの「主権連合」の構想を基に、1967年、新党「主権連合運動 (Mouvement Souveraineté-Association)」を結成する。

その第一回目の党大会において、党の方針を巡り大きな議論の対立があった。その対立はフランソワ・アカン (François Aquin) とレヴェックの間のナショナリズムについての方向性の違いであった。作家のユベール・アカン (Hubert Aquin) のいところでもあるアカンは、ド・ゴール (Charles de Gaulle) 大統領の演説³に影響を受けた純粋な独立主義者であった。アカンは、「主権連合運動」の政策として英語学校への補助金の廃止の提案を行っていた⁴。

そのようなアカンに対してレヴェックはいかなる立場を示したのであろうか。レヴェックは、1968年の『ケベックの選択』という著書の中で、自らのアイデンティティを「我々はケベック人である」とし⁵、そのケベック人のアイデンティティの重要な構成要素はフランス語であるとする。このネイション観に関して注目すべき点の一つは、世俗性である。つまり、カトリックの信仰というのを、ケベック・ネイションの中核的な定義に据えていないわけである。また、レヴェックの思考の特徴として挙げられるのは、個人及び集団の権利や自由主義、民主主義、自由な討論を尊ぶ姿勢である。

以上のようなネイション観をもつレヴェックはアカンが英語系少数派に対して厳しい提案を行ったことに対して、英語系学校への補助金の提供は英語系少数派の普遍的な権利の問題であると述べているように、少数派への一貫した配慮が見られる⁶。ここには、レヴェックの多元性についての志向が見られる。

さらに、ナショナル・アイデンティティに関しても、ケベックにアイデンティティを感じる者もいれば、カナダとケベックの両方にアイデンティティを感じる者もいる。レヴェックは、このナショナル・アイデンティティの重層性に資する国家制度として、純粋な独立ではなく、「主権連合」という国家連合を提案する。それは、政治的にはケベックが主権を獲得しつつ、共通の通貨や自由貿易を通じたカナダとの経済連合を図るというものである⁷。この思考に基づいて、レヴェックは1968年、ケベック党 (Parti Québécois) を設立するわけである。

以上のように、民主主義や多元性とナショナリズムの両立こそがレヴェックの意図であり、「静かな革命」により生じたケベックのナショナリズムを導こうとした方向であったと言える。

(あらき たかひと 岐阜市立女子短期大学専任講師)

注

- 1 Kenneth McRoberts (1993), *Quebec: Social Change and Political Crisis*, McClelland and Stewart, pp.128-131
- 2 René Lévesque (1979), *My Québec*, Toronto Books, p.18
- 3 1967年、フランスのシャルル・ド・ゴール大統領がモンリオール市庁舎のバルコニーから「自由ケベック万歳」と叫んだ事件。この演説はケベックの独立主義者を熱狂させた。
- 4 Jean Provencher (1975), *René Lévesque : Portrait of a Québécois*, Gage, pp. 252-253
- 5 René Lévesque (1997), *Option Québec :Précédé d'un essai d'André Bernard*, TYPO, p. 161.
- 6 René Lévesque (1986), *Memoirs*, McClelland and Stewart, p. 230
- 7 レヴェックの「主権連合」については、以下の文献も参照。荒木隆人 (2015)『カナダ連邦政治とケベック政治闘争－憲法闘争を巡る政治過程』法律文化社、56-57頁。

世界文学から見た〈静かな革命〉
La Révolution tranquille au prisme de la littérature-monde

〈静かな革命〉における脱植民地化の言説について：
雑誌『*Parti pris*』を中心に
Discours de la décolonisation dans la Révolution
tranquille : autour de la revue *parti pris*

廣松 勲
HIROMATSU Isao

本発表では、1960年代に刊行されていた雑誌『*Parti pris*』（1963～1968年）を主たる分析対象として、〈静かな革命〉というケベック社会の大きな変容の中で、どのような社会的言説が広まっていたのかについて概略的に論じた。その際に注目したのが、「脱植民地化 *décolonisation*」に関わる言説である。とりわけ、上記雑誌における「紹介」や「マニフェスト」における脱植民地化に関わる思想的背景や用語法を検討しながら、本雑誌がどのような言説のネットワークの中に置かれているのか、そしてナショナリズム運動の只中で、できる限り世界への開かれを確保しようと努めたケベック知識人たちの試みについて論じた。

まず始めに、雑誌『*Parti pris*』それ自体や本雑誌に関する研究状況について、歴史的・社会的に側面に注目しながら概説した。その上で、主にマニフェストにおいて開示される執筆者たちの思想的背景として、マルクス・レーニン主義や実存主義に留まらず、旧植民地出身者による脱植民地化の思想が存在することを指摘した。とりわけ、マルティニック島出身の精神分析家フランツ・ファノンや詩人・政治家エメ・セゼール、さらにはチュニジア出身の作家・批評家アルベール・メンミらの思想に依拠することで、マルクス・レーニン主義の理論装置を核としながら脱植民地主義と社会主義への傾倒が見られることを論じた。本雑誌はこのような知的操作を介して、ケベック州という歴史的・社会文化的文脈を、広く中南米諸地域やアフリカ諸国における革命運動との連帯へと接続しようという企図に貫かれていた。

このような概説を行った上で、より具体的に、創刊号における「紹介」（1963年10月・第1巻）と2つの「マニフェスト」（1964年9月・第2号・第1巻と1965年8-9月・第3号・第1-2巻）について、それぞれ分析を行った。まず、「紹介」においては、ケベック州のフランス系カナダ人が置かれている疎外状況について、「植民地化、搾取、支配、統制」といった概念で論じられており、そのような状況から脱却する方法として革命的段階へと移行することの必要性が説かれていた。同時に、

前世代のケベック知識人と自らを対比させながら、より現実主義的かつ個別主義的な形で小文字の真実を追求するという立場が明示されていた。このような立場は引き続き、2つのマニフェストにおいても見られる語り方となる。

次に、1963年のマニフェストにおいては、1837年の「パピノーの反乱」や1945年の『*Le refus global*』が引き合いに出された上で、自らの立場取りの正統性をより鮮明に主張することになった。その上で、ケベック社会の脱植民地化の筋道として、現状認識・意識化を通じた革命運動、革命運動を通じた独立、独立を通じた国民解放といった筋道が明確化されていた。このような理念的立場を表明すると同時に、脱植民地化と革命実現に向けた運動の一環として、教材出版や活動・教育拠点である「Club parti pris」の開設なども謳われていた。

最後に、1965年のマニフェストにおいては、進行中の大きな社会変容に関する分析が行われる一方で、基本的には前述の2つのテキストと同様の立場取りから、ただしより詳細に植民地化状況の把握やそれからの脱却方法が論じられた。特徴的であるのは、このような社会分析に加えて、とりわけ近年に脱植民地化を果たした南アメリカ諸国との連帯が強調されることで、本雑誌の主張・運動の国際性が強調されたことであった。

このように3つのテキストを分析することで、雑誌『*Parti pris*』は主に革命思想とその実践を媒介としつつ、「ケベック性」の探求を「世界性」の探求へと繋げることを試みていたと指摘した。すなわち、本雑誌における脱植民地化の言説とは、ケベック社会という個別地域の社会運動が、自閉状態に陥らずに世界の社会運動へと開かれるために、戦略的に選ばれた一つの語り方であったといえる。

実際とて、残念ながら、本雑誌の主張する意味での社会主義革命やケベックの独立は実現することはなかった。しかし、少なくとも現在のケベック社会における世界状況への敏感な視線や被抑圧者への寛容な姿勢といったバランス感覚の萌芽は、既に本雑誌における脱植民地化の言説においても見られるだろうと結論付けた。

(ひろまつ いさお 法政大学専任講師)

世界文学から見た〈静かな革命〉
La Révolution tranquille au prisme de la littérature-monde

植民地としてのアメリカと世界文学
Les Amériques coloniales et la littérature-monde

立花 英裕
TACHIBANA Hidehiro

本発表では、ケベックを代表する詩人ガストン・ミロンを世界文学という文脈の中で読んでみたい。

ジョルジュ＝アンドレ・ヴァションは、ミロンを「最初のケベック詩人」と呼んでいるが、それはミロンが「静かな革命」の糸口となる領土的想像域を切り出したからである。その詩は、土地への繊細で鋭敏な感覚に貫かれている。自然や風景は単純に賛美されるのではなく、むしろ欠如や剥奪の感情に結びついて瞬発的に喚起される。その「領土的想像域」は負の、マイナスの所有意識に結びついている。一般的に言って、アイデンティティは所有形態に照応した自己意識として構成されるが、彼においては、所有の欠如によって自他が絶えず入れ替わる表象が紡ぎだされて、独特の異他性の空間が点滅する。ここにガストン・ミロンを世界文学として読める手がかりの一つがある。ミロンの他者性は、「私の帰国のために Pour mon rapatriement」と題された詩における「私は一度たりと他国に旅したことはない／私の国よ 私はおまえの方へと旅をするのだ」のように、カフカにおける自己の他者性や、空間の異他性に通じる想像域を開く。しかし、彼の詩は、負の意識だけに終わるのではない。そこには、他者性に触まれながらも、破裂するユーモアがある。その不意の笑いと歌には、自己肯定の契機が潜伏している。

ここで、「静かな革命」における文学の役割がどのようなものだったかを振り返っておこう。少し遡って見るなら、19世紀末から両大戦間にかけてのフランス系カナダ人のナショナリズムは、リオネル・グルーの思想にその典型を見ることができる。それは、いわゆる「生き残り」の言説に支えられていて、自己の起源をルイ14世時代のフランスに求め、そのことによってアメリカ大陸での宗教的ミッションを担った農村共同体を維持させるためのイデオロギーだった。グルーの言説は過去に執着し、民主主義と近代化の拒絶によって古い共同体の解体を防ごうとしていた。ところで、20世紀のナショナリズムは、左右様々に分岐するとはいえ、第一次世界大戦後のヴェルサイユ条約における「民族自決権」に象徴的に示されるように、主体的で内発的な自己発展への権利を各ネイションに認める変革運動でもあった。リ

オネル・グルー的ナショナリズムは、ナショナリズムに内包される近代的価値観とカトリック的価値観との間に内在的な矛盾を抱えていたと言わなければならない。「静かな革命」は、その矛盾の内的破裂であり、新たな自己意識を構成するためのパラダイム転換だった。それはまた、主体的な近代化プロセスが、政治的・制度的裏付けをもたないフランス系カナダ人という茫洋とした集団によっては実現不可能であり、州政府という政治機構を現実利用できる集団、すなわち「ケベック人 Québécois」によってのみ可能になることを自覚する、自己意識の「革命」でもあった。ところで、このような主体と価値の変換は、新たな言説の発明を条件としていて、文学なしには実現できない。ようするに、ケベック人は、文学によって自分たちの土地の固有性を言説化し、領有化を試み、そのプロセスの中で感情を土地に投影し、自分たちの領土空間を一つの想像域にしたのである。それは文化的空間意識の変換であり、アメリカ大陸という空間を領有化し、その風土に適合した自己の身体性を具現するための新たな言説の要請なのである。

ガストン・ミロンは、言語によってネイション意識の転換を試みた。彼の詩には、ケベックの人間でなければ感じとれないような、自然や日常生活に密着した表現が織り込まれている。たとえば、長編詩「愛の行進」の詩句「君の首に立ち昇る蓮の花の白さ」は、恋人の描写であると共に、ケベック的自然を鮮烈に浮き上がらせる。こうした比喩的・隠喩的喚起は、人間の事象を自然の事象に結びつけ、所有意識が介在する重層的・多元的な想像域を拓く。詩句「巨大なモンレアルは宇宙のカオス」では、アメリカ大陸の空間に住む人間としての自己意識が読み取れる。だからこそミロンの詩は、同じ空間を共有する移民や難民とも何かを分かち合う世界文学として読めるのである。

ミロンの詩は、言うまでもなく、彼だけの独創ではない。彼の背後には、近代的自我に対応した詩的言語を発明した詩人たちが控えている。特に挙げなくてはならないのは、サン＝ドニ・ガルノーである。この夭折した詩人は、「鳥籠 cage d'oiseau」に見られるように、平易な口語的表現によって内部に巣くった異性を表現してみた。ただ、その詩的世界は、フランス系カナダ人でなければ絶対に書けないようなものではない。ガストン・ミロンは、サン＝ドニ・ガルノーの詩的言語を出発点として、彼の時代、その歴史的条件下にある自己意識を言語化した。それはまた、グルー的な農村ではなく、都市を住処とした精神的流浪者の歌だった。そうした彼の詩的言語がよく見てとれるのが、上に引用したような恋愛詩である。ミロンの詩において、女性は社会や歴史の仲介者として顕れ、不協和音に満ちた出会いの中で詩人に自覚を促し、その社会意識、歴史意識に肉体性を備えた言葉を与えるのである。

最後になるが、ミロンが、ネグリチュードの詩人エメ・セゼールを発見し、紹介したことに触れておこう。エメ・セゼールの詩と『植民地主義論』は、「静かな革命」の反植民地主義的言説に大きな影響を与えた。とりわけ、ピエール・ヴァリエール『アメリカの白い黒人』の直接的な発想源になっている。おそらく、ミシェル・ラロンドの詩「スピーク・ホワイト」にもネグリチュード的の黒人像の影がある。

エメ・セゼールの思想に新たな展開を与えたエドゥアール・グリッサンが、ミロンの『寄せあつめの男』ガリマール NRF 版に序文を寄せているのも、そうした歴史的・文学的文脈があるからである。ミロンの欠如の意識は、カリブ海やアフリカの文学と響きあう側面をもっていて、そこからもミロン詩の世界性が見えてくるのである。

(たちばな ひでひろ 早稲田大学教授)